

日本医師会

赤ひげ大賞

日本の医療 充実・発展の力に

日本医師会と産経新聞社が主催、ジャパンワクチンの特別協賛により地域の医療現場で長年にわたり、健康を中心に地域住民の生活を支えている医師にスポットを当て、その活躍を顕彰することを目的として平成 24 年度から実施している「日本医師会赤ひげ大賞」。3 回目となる今回は 8 月 28 日に選考会を開き、10 月に受賞者を発表する。「赤ひげ大賞」が医師の励みとして定着すれば、地域医療の一層の発展にも貢献しそうだ。

第 3 回 8 月 28 日に選考会

「赤ひげ」は、江戸時代愛称は頼れる医師の代名詞の養生所を舞台にした詞になっている。かえり山本五郎の時代小説「赤ひげ」に光を当てて「赤ひげ診療譚」の主人進む現代の日本。過疎地公の愛称。武骨ながら親や山間地などでは、身近に治療を行い、患者から頼れる存在の「かかりつけ医師」の存在が、またな共感を呼び、作品はますます重要になってい

画、テレビドラマ化も映る。赤ひげ大賞は、地域れ現代においても、そのでひたむきに汗を流し、



安倍晋三首相が出席した第 2 回表彰式

3 月 28 日、東京・内幸町

夢のある地域を創り上げるために



日本医師会会長
横倉義武氏

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、地域の中で住民の皆さんに寄り添いながら献身的に診療に従事している医師を顕彰することを目的に創設し、今年で第 3 回を迎えます。これまで受賞された先生方は、地域の赤ひげ先生として住民が安心して暮らしていけるよう診療活動を行っている素晴らしい先生ばかりでした。

私も医師の責務は、国民が健康で文化的な生活を送るに支える手助けを行うことであり、私どもが担う医学・医療の恩恵は、広く国民に還元されるべきものであります。そして、医療の根幹は、健康で安心して暮らせる「まちづくり」であり、そのためには、住民の方々の連携によって地域の力を強め、その「まち」に健康の番人たる「赤ひげ先生」がいるということが重要であると考えます。

将来に夢のある地域を創り上げるためにも、「日本医師会 赤ひげ大賞」を通じて一層努力して参りますので、皆さんのご理解を頂きますようお願いいたします。

第 2 回赤ひげ大賞受賞

大岩診療所 大岩香苗院長に聞く

医師が不足している地域の現場で、奮闘を続ける女性医師も少なくない。第 2 回赤ひげ大賞を受賞した兵庫県上郡町の「大岩診療所」の大岩香苗院長もそんな一人だ。「受賞を一番喜んでくれたのは患者さんかもしれないですね。ますますがんばらなければいけない、と気を引き締めています」と笑顔で話す。大岩院長は地域医療の充実や赤ひげ大賞に寄せる思いを聞いた。

診療所のある上郡町は県西部の人口約 1 万 6 千の町。65 歳以上人口が 28 〇を超過。高齢化と人口減少が地域の大きな課題になっている。診療所の待合室は連日、高齢者を中心とする患者であふれ、一人一人に「どうしたの?」「なんか調子悪いの?」と声をかけ、まるで家族のように温かく迎える。

「先日は、高齢の男性の患者さんが近づいてきて、直立不動の姿勢で『先生、赤ひげ大賞の受賞、おめでとうございませう。そんな先生に診ていただけて私たちが光栄です』とまるでわがことのように祝福してくれて、うれしかったです。受賞したことで、患者さんまで元気になってくれたら、医師として、言つことはあります」。

大学の恩師から手紙が届いた。「女性やけども、メスを捨てなさい。大学を離れたとき恩師にそう言われた。女性外科医として一線の手術現場でバリバリ活躍してほしいというメッセージだった。しかし、地域医療の道に進んだことで、結果的には一線の手術現場から遠ざかってしまった。そのことにずっと負い目があったという。『申し訳ない、先生に合わせる顔がない、』と思っていました。ところが、手紙には『地域でがんばっているんや

若い医師にも現場を見る機会づくりを



な」と励ましのことが書かれていました。ああ、ちゃんと認めてもらえた、胸が熱くなりました。赤ひげ大賞のおかげで、もやもやした気持ちが吹っ切れて、自分の進む道をあらためて見つめるきっかけになりました。『大学時代の恩師や開業時に指導いただいた先生方からもお祝いのお手紙やお電話をいただいた』と微笑んだ。

「一人暮らしの高齢者が全国で増加している。その数は平成 22 年で約 4 80 万人に上る。上郡町も例に漏れない。かかりつけ医の重要性はますます増している。」

「それで、最も求められるのは、患者の容体が急変したときのバックアップ体制だ。『急変時は、大きな病院の先生に助けを求めたい』といふ声はよく聞きますが、ここには近くに入院できる病院はありません。近隣の市町まで、救急車を飛ばしても 20 分。患者のみならず、それが不安だと言います。かかりつけ医の一つの仕事は、そのとき病院との間を取り持つことだと思えます。何かあったとき、いつでもちゃんと予約が取れて、入院ができるようなネットワークを整備されれば患者さん安心できると思います」。

外科医の父の意を受けて地元で開業して 26 年。今、長男・長女が医師になり、次女も大学の医学部に進んだ。「今は、在宅の医師について地域を回る研修医のプログラムもあるそうです。若いときに、こうした現場を見る機会があると、将来、地域に帰るといふ選択も広がるのでは、と思います。そういう機会が増えれば、将来的にも『赤ひげ先生』を継承していくことができるのではないしょうか」と語る。

地域住民のための診療活動に敬意



ジャパンワクチン会長
長野明氏

赤ひげ大賞は今年で第 3 回となり、特別協賛をさせて頂いた今年で 10 年になりました。大変感謝の意を感じております。第 1 回、第 2 回とも、全国各地より推薦された皆様が、地域住民の健康や安定の有様、そして何よりも、地域住民の健康や安定した日常生活の維持を第一義に考えられた診療活動

動をされておられることに、敬意を表するものでございます。我が国では、いわゆる団塊の世代が後期高齢者となるまで残すところ 10 年ほどとなり、国民にとって、更なる安心が実感できる地域医療体制の確立が求められております。その実現のためにも、現代の赤ひげ先生であるかかりつけ医の先生方のご尽力にすぎず、先生方のご活躍が一層しやすい関連諸制度の整備、充実も必須なことと感じております。今後、「日本医師会 赤ひげ大賞」が国民の皆様にとって、地域で活躍されている医師の皆様のご活躍を知れる機会となることを願っています。

日本医師会 赤ひげ大賞

【主催】日本医師会、産経新聞社
【後援】厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ
【特別協賛】ジャパンワクチン株式会社

地域密着の重要性増す



羽田信吾氏
昭和館館長・宮内庁参事

久しく高齢化や過疎化に悩んできた農山漁村地域だけでなく都会でも高齢化が進行しています。住民の医療や介護の確保の問題は胸突き八丁の時を迎えています。今後は、地域にあって住民に心を寄せ住民の訴えに親身に応える医師の存在がいよいよ重要になってくるでしょう。3 回目を迎える赤ひげ大賞が、地域医療のために献身的に努力する医師の活動の重要性を多くの人々が認識し、そうした医師が全国各地に輩出する契機となることを願ってやみません。

希望と勇気を与える賞



小林光恵氏
作家

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、広く社会にかけつけ医の重要性を伝える力になると同時に、医師とともにがんばっている医療職や事務職、そして医師のご家族などみなさまへのエールにもなります。以上は、第 2 回の審査に参加させていただいて感じたことの一つです。医療を提供する側として働く方々にも希望と勇気を与える賞だと思います。医師として人として日々がんばっている方々に今年も出会えるのを楽しみにしています。

安心・安全に多大な貢献



向井千秋氏
宇宙航空研究開発機構
宇宙医学研究センター長

赤ひげ大賞の審査にこれまで 2 回参加させていただき、大変光栄に思っています。受賞された先生方が、地域住民の皆様とともに安全・安心で住みやすいコミュニティづくりをされている姿に感服しています。昨年の第 2 回大賞には女性初の受賞者もありました。この賞がより多くの人たちに認識されることで、セーフティー・ネットとしての医療が日本の国土に余すことなくいきわたることを期待しています。

感謝の気持ち伝えたい



山田邦子氏
タレント

どんなにハイテクな時代がきても医学・医療の最前線を支えているのはやっぱり人です。ピュアでひた向き、多くの患者と長く向き合っている小さな町や村の医師に日ごろの感謝の気持ちを伝えたい。「日本医師会赤ひげ大賞」に選ばれた先生方は「当たり前のことをしているだけです」と、おっしゃって、またまた感動してしまいます。全国にいらっしゃいます先生、私たちのためにありがとうございます。しっかり選考委員を務めさせていただきます。

選考委員のコメント

力をあわせて、未来を守る

ワクチンによる予防こそが、これからの医療の中核になる。
ましてや感染症の予防は、ひとりを守るだけでなく、
その周辺の人々、ひいては社会や、この国そのものを守ることになる。
そう信じる私たちは、新しい時代に向かって、力強く歩み続けていきます。